



マザーは生きていた

一九七九年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサは受賞十四年前の六五年に、神



ありし日のマザー・テレサ

の愛の宣教師会を設立、今では世界百二十三カ国六百十の修道院で活動している。

カンボジアでは三カ所で活動しており、今回、そのうち二カ所を訪れた。一カ所はシェムリアップ近くにある孤児や障害児の子ども

の家。もう一カ所は首都プノンペン近くのエイズや結核患者のホスピスである。

子どもの家ではシスターとそれをサポートする人たちが子ども十人七人を世話している。訪れた時、ベルギーから女子大生、オーストラリアから社会人の男性がボランティアに来ていたのに驚いた。

子どもの家の院長は韓国人のシスター



本部へ。そこからカンボジアに派遣され、弱い立場の幼児の世話をすることに自分の生涯を捧げている。

口で言うのはやさしいが、貧しい他者のために自分の生涯を捧げるのは簡単なことではない。なぜこんなことができるのだろうか。修道会の名前のように「神の愛」への絶対な確信のなせる業である。

タリはインド人。日本語を上手に話されたのでびっくり。

神の愛の宣教師会は日本にも三カ所あり、日本でも九年間働いたという。

神の愛の宣教師会ではないが、タイから来た別の修道会のシスターに「なぜシスターになられたのですか」と質問したら「若いころマザー・テレサの生き方を知って感動し、自分もシスターへの道を選んだ」という答えで

あった。他者のために自分の生涯を捧げて生きるシスターは皆、輝いて見える。

かく言う私の娘も学生時代に二度、インドのマザー・テレサを訪ね、シスターにはならなかったものの、結婚もせず、NGO（非政府組織）で、パレスチナの貧しい母子支援活動を続けている。

マザー・テレサが広島にいられた時にお会いしたが、広島平和記

念聖堂に入られる時、入り口のドアが大きいせいもあるが、本当に小さなお婆ちゃんだった。愛の反対は、悪ではなく、他人への無関心だと言われたことが実に新鮮に心に入った。マザー・テレサが帰天されたのは一九九七年、享年は八十七歳であった。亡くなられたがマザーは今も生きておられるとカンボジアで実感したのである。（元山口放送取締役ラジオ局長）



この子を誰が孤児にしたのだろうか